

フラクタル⇔フラクチャー

2022.3.5 SAT→3.21 MON

OPEN 10:00-18:50 会期中無休 観覧無料

秋田公立美術大学サテライトセンター

主催/秋田公立美術大学 企画・運営/NPO法人アーツセンターあきた キュレーション/武田彩莉
お問い合わせ/秋田公立美術大学サテライトセンター (NPO法人アーツセンターあきた)

TEL 018-893-6128 FAX 018-893-6136 E-mail info@artscenter-akita.jp URL https://www.artscenter-akita.jp



出品作品リスト/List of Works

Title 箱の中に帰す
Date 2022
Medium ハンドスキャナーで撮影
Size 2000(mm)×6300(mm)

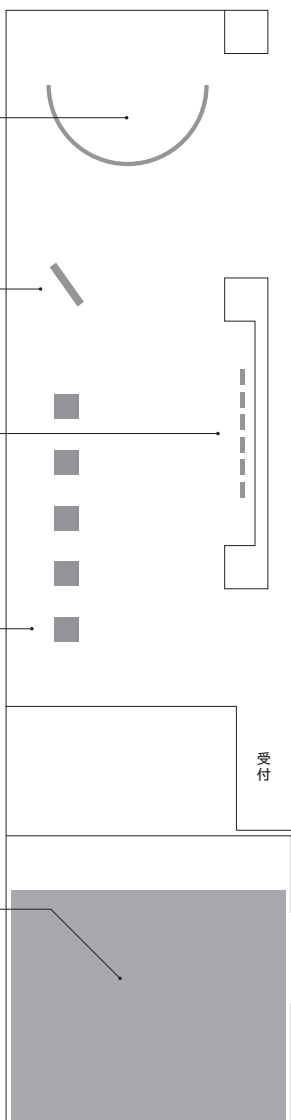
Title 箱の中の猫〈身体〉を、
観測〈表示〉する時
Date 2021
Medium ハンドスキャナーで撮影
Size サイズ可変

Title Surface drawing
Date 2021
Medium iPhoneで撮影
Size サイズ可変

Title Melting scenery
Date 2021
Medium 写真に除光液
Size 2L版

Title 惨劇のアーキテクチャ
Date 2021
Medium 砂糖に映像投影
Size サイズ可変

会場/Map



再帰する光景の手触り

外に出なくても他者とコミュニケーションを取る方法を、ディスプレイとインターネットにより獲得して久しい。それは尚のことここ3年ほどで日常生活のあらゆる場面の一部となったように感じる。

相手の顔が見えるということは、安心感の指標として機能するはずだ。しかし、ディスプレイ上の他者の存在はどこか息遣いが曖昧な、話しぶりや身振り、表情が誇張されたキャラクターのように感じることがある。それはディスプレイに映る相手を通して、自分自身にも投影される。平面上で見る、見られることを前提とした自分になっていくような。

大越は自身の作品に映るものを光景だという。私が見てきた彼女の作品で印象的なのは、確かにそこに存在するものの様子をそのままデジタルデバイスで切り取り、現像し漂白剤によって物理的で不可逆な現象を与えるというものだった。

本展覧会で特徴的なのはそれらに加え、作者自らのポートレートや身体をイメージに取り入れるというところだろう。これまで見えるもの、映るものであった光景、そして大越自身が制作という行為を施すものに自分自身が光景として現れる。

ディスプレイの向こうの不確かさは、同じ平面を通し、合わせ鏡のように自分自身の不確かさをも表示する。大越はその平面上の再帰を指先に呼び起こす。

手で「触れる」という行為は幼児期の発達段階から世界を認知するために重要な感覚である。

しかしこれらは成長とともに徐々に視覚の優位にとって変わられる。

大越の制作の手つきは、「触れる」という行為を再帰する平面の世界から再び指先で探り当てようとしているように感じる。

武田彩莉/キュレーション